

生徒および保護者からの特別の教育的ニーズに応えるための試み
～全日制高等学校の通級による指導（自校通級）について～

宮城県蔵王高等学校
教諭 大越 貞人

I 学校の特徴・現状

本校は宮城県白石女子高等学校蔵王校が前身で、平成7年7月に宮城県教育委員会が宮城県白石女子高等学校蔵王校の独立を発表し、平成8年4月に学年制による全日制課程普通科（女子1学年2クラス 80名）の宮城県蔵王高等学校として開校した。その後、平成11年4月に単位制による全日制課程普通科（男女1学年3クラス 120名）となったが、平成28年4月に単位制から再び全日制課程普通科（男女1学年2クラス 80名）に戻り、現在に至る。

本校では、通級による指導の他にも平成11年度にミヤギ アドベンチャー プログラム（MAP）の実践校に指定され、問題解決型学習法に取り組んできた。これは、生徒間の協調性やコミュニケーション能力などを育んでいく活動になる。この他、総合的な学習の時間（1学年は総合的な探求の時間）を中心にグループ内での対話的な活動を通し地域に貢献できる人材の育成を目指した蔵王あすなろプロジェクト（ZAP）や“話す”，“聞く”の活動を通してコミュニケーション力の向上と良好な人間関係の構築を目指すp4c（こどもの探求的な会話）に取り組んでいる。

II 主題設定の理由

本校には、以前より自閉的傾向のある生徒や発達障害のグレーゾーンと思われる生徒が在籍し、それらの生徒は、生徒間および教職員とのコミュニケーションや人間関係形成に困り感や不安を抱きながら学校生活を送っていた。このような生徒に対し、これまでは教職員個々の経験や能力に頼った対応をとる傾向があり、教職員間での共通理解のもと組織的かつ継続的な指導を行うことがあまりなされていなかった。そこで、この事態を改善するために本校では令和元年度より表1にあるように通級による指導（自校通級）を導入した。なお、生徒および保護者からの特別の教育的ニーズに応えるため、組織的な取組を確立したいと考え、この主題を設定した。

教科・科目名	自立活動・あすなろスタディー
実施学年	2学年
単位数	2単位
受講生徒数	7名（生徒及び保護者と合意形成が図られている）
対象生徒	自閉的傾向にあり、コミュニケーション力、人間関係形成力に困り感や不安のある生徒

表1 本校での通級による指導（自校通級）について

III 通級による指導（自校通級）への取組

通級による指導の形態の一つである自校通級の取組は県内でも実践例がないため、通級指導準備委員会（以下、準備委員会とする）を立ち上げ、準備委員会を中心に話し合いを行い、その中で必要事項や課題などを出し合い、優先順位をつけ1つ1つ解決を図りながら、令和元年度からの実施に向けた準備を平成30年度の10月下旬から始めた。私は教務企画部長の立場で、準備委員会のメンバーの一人として通級による指導の実施に向けた準備に関わったが、その過程の中で自立活動を受講する生徒の決定、校内の体制作り、通級による指導に対する教職員および生徒の理解を深める取組が通級による指導をスムーズに進めるポイントになると考える。

1 自立活動を受講する生徒を決定するまでの取組

今年度の入学生の中から自立活動を受講する生徒を決定するため、基本的に準備委員会の業務を引き継いだ通級指導小委員会が中心となり、いくつかの段階を踏んで進めていった。第一段階として、平成31年3月下旬に実施した新入生対象の予備登校の際、準備委員会を代表し、私が生徒および保護者に対して通級による指導の概要を説明した。その上で、保護者には図1-1・2を用いて4月上旬に、生徒には図2-1・2を用いて5月下旬に、それぞれに調査を実施し、その結果の分析を行うこととした。なお調査用紙には、平成28年度に宮城県総合教育センターで作成されたア

シストパックをベースに本校の実態に沿った内容に一部修正を加え、「高校生活を充実させるための調査」という名称にしたものを用いた。

① 保護者記入用

高校生活を充実させるための調査

受験番号: 性別: 男・女

生徒氏名: 記入者: 父・母・その他()

お子さんの高校生活を充実したものにしていけるための調査です。学校の教職員以外が見ることはありませんので、安心して記入してください。

1. これまでの家庭生活や学校生活の中で、お子さんについて気になること・心配なことはありましたか？(健康面については「健康カード」に記入して下さい)

(1) あった / なかった

(2) 「あった」と回答した方に伺います。それはどんなことですか？

例: 友達とうまく関わることでできず、1人であることが多かった。/ 忘れ物が多かった。

2. 上記のことやこれまでの学校生活(小学校・中学校)で、担任の先生方と話し合ったり配慮をしたことはありましたか？

(1) あった / なかった

(2) 「あった」と回答した方に伺います。それはどんなことですか？

例: 急な予定変更が苦手のため、変更がある場合は紙に書いて渡してもらっていた。

3. 学校生活を送る上で、不安なこと・相談したいことがあれば記入してください。

※裏面もご記入ください

図1-1 保護者用調査用紙(表面)

② 保護者記入用

4. ①～③を読んで、お子さんについて当てはまるものや、小・中学校の先生からお話があったことについて「よくある」「時々ある」「ない」「分からない」の4つから近いものに○をつけてください。

	よくある	時々ある	ない	分からない
1				
2				
3				
4				
5				
6				
7				
8				
9				
10				
11				
12				
13				
14				
15				
16				
17				
18				
19				
20				
21				
22				
23				

御記入ありがとうございます。お子さんの高校生活が充実したものになるよう、今回の調査の情報は、今後の面談等に活用させていただきます。

※記入後は封筒に入れ、入学後に各クラスで行われる SHR の際、担任へ御届出ください。

図1-2 保護者用調査用紙(裏面)

③ 生徒記入用

高校生活を充実させるための調査

年 組 番 氏名

この調査は、皆さんの高校生活を充実したものにするための調査です。学校の先生以外が見ることはありませんので、安心して回答してください。

1. それぞれの質問を読んで「よくある」「時々ある」「ない」の3つから自分に近いものに○をつけましょう。

【学習】

	よくある	時々ある	ない
1			
2			
3			
4			
5			
6			
7			

【コミュニケーション】

	よくある	時々ある	ない
1			
2			
3			
4			
5			
6			
7			
8			
9			
10			

図2-1 生徒用調査用紙(表面)

④ 生徒記入用

【その他】

	よくある	時々ある	ない
1			
2			
3			
4			
5			
6			
7			

2. 学校生活を送る上で、不安なこと・相談したいことがあれば下に記入してください。

回答ありがとうございます。困っていることや悩んでいることがあれば、誰かに相談しましょう。先生方は、あなたの高校生活を応援しています。

図2-2 生徒用調査用紙(裏面)

第二段階は、調査用紙の各項目の“よくある”の欄に印をつけた結果をまとめた分析シートを作成し、それに基づき、通級による指導の説明を行う対象生徒を絞り込むことにした。なお、本校ではコミュニケーション力と人間関係形成力

に困り感や不安を感じている生徒をターゲットに指導を行うため、生徒および保護者がそれぞれ「人間関係」「コミュニケーション」「心理の安定」のいずれかの“よくある”の欄に印が付いている事が前提で、表2のように3つのパターンに分類することにした。その中で、分類1（生徒本人と保護者が同じ欄に印をつけた場合）または分類2（生徒本人が2つ以上印をつけた場合）に該当する場合、通級による指導の説明を行う対象生徒とすることにした。しかし、分類3（保護者のみが印をつけた場合）に該当する場合は、生徒自身にコミュニケーション力や人間関係形成力に困り感や不安がないと判断し対象外とした。このように分類したのは、現在、自立活動に取り組んでいる7名の生徒の中に昨年度、合意形成を図る際、生徒本人の困り感や不安感が高くないにもかかわらず自立活動を受けさせたい、という保護者の強い要望があり受講することになった生徒がいる。しかし、その生徒は自立活動に対する意欲が感じられず、なかなか指導によってこない状態にある。そのため、今年度は生徒本人の問題意識の有無を選定する上で重要視することにした。この他、3つの分類に該当しない表2のNo6のような生徒の場合は、個別審議の対象とし日常の学校生活等を鑑み、通級指導小委員会で話し合いを行い対象生徒とするか否かを決定することにした。なお、この段階で対象生徒は15名から8名に絞り込むことができた。

N o	本人/保護者	人間関係	コミュニケーション	心の安定	学習	その他	分類
1	保護者		○	○	○		分類1
	本人		○	○	○		
2	保護者			○	○		
	本人	○		○			
3	保護者						分類2
	本人	○	○	○			
4	保護者				○		
	本人		○	○	○		
5	保護者	○	○		○	○	分類3
	本人				○		
6	保護者		○			○	その他
	本人	○			○	○	

・分類1（説明の対象者）：生徒本人と保護者が同じ欄に印をつけた場合
 ・分類2（説明の対象者）：生徒本人が2つ以上印をつけた場合
 ・分類3（説明の対象外）：保護者のみが印をつけた場合
 ・その他：個別審議の対象

表2 調査用紙をまとめた分析シート

第三段階は、通級による指導の説明を行う対象生徒の授業を担当している教職員を対象とした調査を行い、生徒および保護者との面談の資料として活用することにした。この調査では、山形県立新庄北高等学校最上校で使用している図3の調査用紙（読む・書く・話す・社会性・自立活動など33項目を確認できる学校生活チェック表）を活用した。この調査結果を教職員のチェック数の多い生徒と少ない生徒とに分類した。その上で、自立活動の受講の有無と照らし合わせたのが表3で、教職員のチェック数の多い生徒が令和2年度の自立活動の受講を希望し、少ない生徒は受講を希望しないという結果になった。

学校生活チェック表

通級指導小委員会

下記の生徒は、令和2年度、通級による指導を希望し、自立活動を選択した生徒になります。今後の指導の参考にしますので、下記の各項目に該当するものがある場合、“○”を付けてください。お忙しいところ、まことに恐縮ですが、6月25日(火)までに担当者(海部)まで提出をお願いします。

【記入者氏名:

】

・該当する項目に“○”をつけてください。 ・基準は「気になる」でお願いします。		番号	1	2	3	4	5	6	7
読む	読みや飛ばしや、読み違いが多い	氏名							
	文に記述してある内容理解が困難である								
書く	字の形がうまくとれなかったり、判読が難しい字を書く								
	板書を写すのに極端に時間がかかる								
	文法的に正しい文章で記述することができない								
聞く	一度に複数の指示が聴き取れず混乱する								
	書けば覚えられるが、口頭での指示は覚えられない								
話す	たびたび言葉につまり「あの、その」になる								
	文法的に誤りが多い不完全な話し方をする								
	事実を関連づけて述べること(話すこと)が困難である								
	知識は豊富だが、一方的に話す								
推論	因果関係の理解が困難で早合点や飛躍した考えをする								
	順序立てができず、先の予測が立ちにくい								
集中	注意を集中することが難しい								
	人が話していても割り込んでくる								
	注意しても多弁が止まらない								
社会性	友人関係の持ち方が下手で孤立しやすい								
	自分の仕事に対して責任をとることができない								
	約束事や提出物など注意されてもやり遂げられない								
	片付けられず、忘れ物や物を無くすことが多い								
	自己抑制の未熟さからトラブルになりやすい								
	ニュアンスが分からない、空気が読めない								
	冗談を額面通りにうけとってしまう								
協応運動	全身運動がぎこちない								
	左右や方向の指示を聞いても的確に行動できない								
	同じ姿勢を保っていることが難しい								
手先	極端に手先が不器用である								
自立活動	清潔を心がけることができないことが多い								
	情緒が不安定なときがある								
	状況を理解して変化に対応することが難しい								
	落ち着きがない								
	目立つ行動を好む								
	自分の考えに固執してしまうことが多い								

図3 読む・書く・話す・社会性・自立活動など33項目を確認できる学校生活チェック表

No	生徒氏名	教職員がチェックしていた総数	自立活動の受講について
1	A	82	受講を希望する
2	B	50	
3	C	16	
4	D	8	受講を希望しない
5	E	8	
6	F	7	
7	G	3	
8	H	1	

表3 学校生活チェック表の結果と自立活動の受講の関係(授業を担当していた教員13名に実施)

図4に示したように、4月上旬から7月下旬までの期間、段階を踏みながら絞り込みを行った。その結果、今年度は8名の対象生徒とその保護者に通級による指導に関する面談を行い、最終的に3名の生徒および保護者から自立活動の受講に関する合意形成を得ることができた。

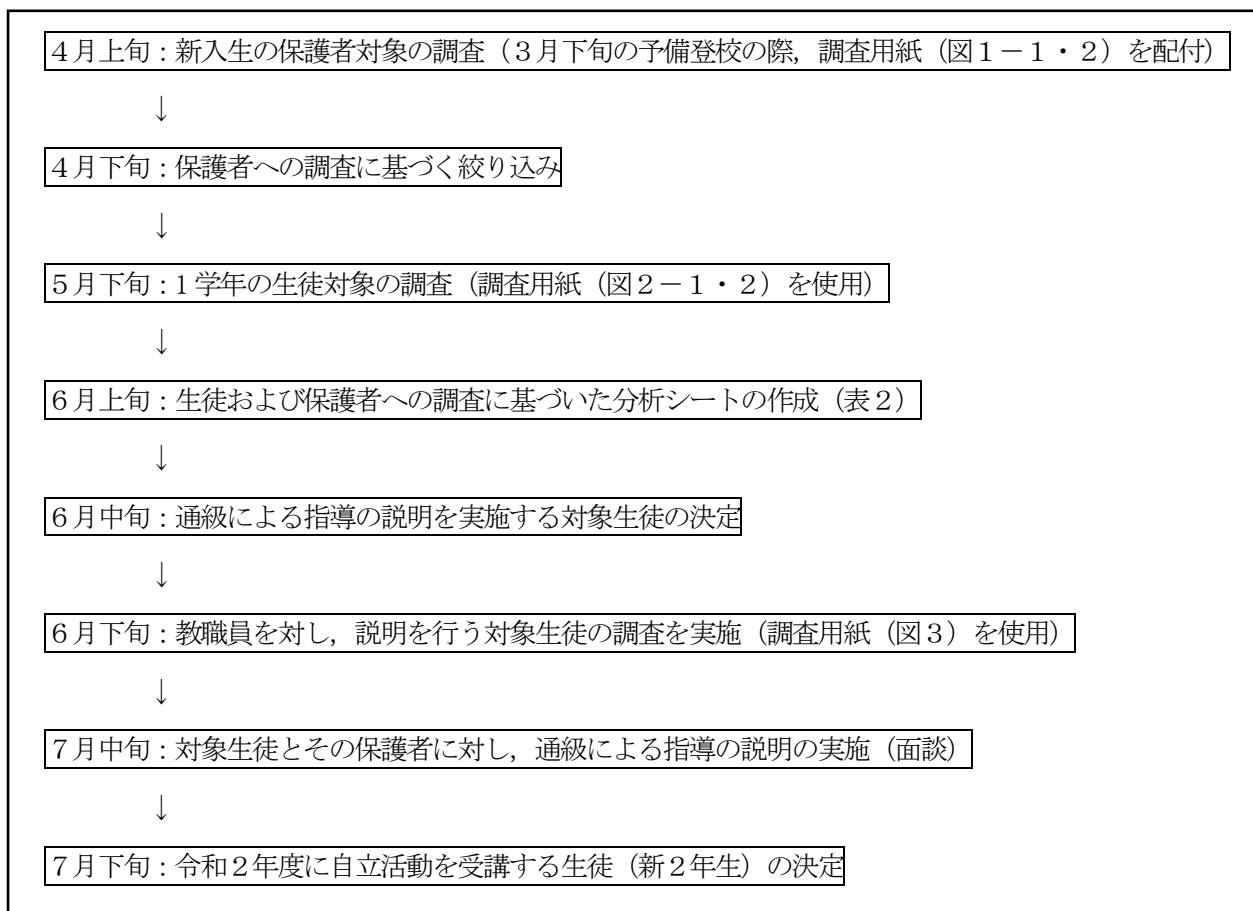


図4 自立活動を受講する生徒決定までの流れ

2 通級による指導を支える校内の体制作り

平成30年度は、10月下旬に先進校視察として山形県立新庄北高等学校最上校への訪問を境に図5のように準備委員会が中心となり校内体制を整えた。なお、準備委員会のメンバーに教務企画部長が入ったことにより、特別の教育課程の編成、評価規定等の見直しの作業をスムーズに進めることができた。

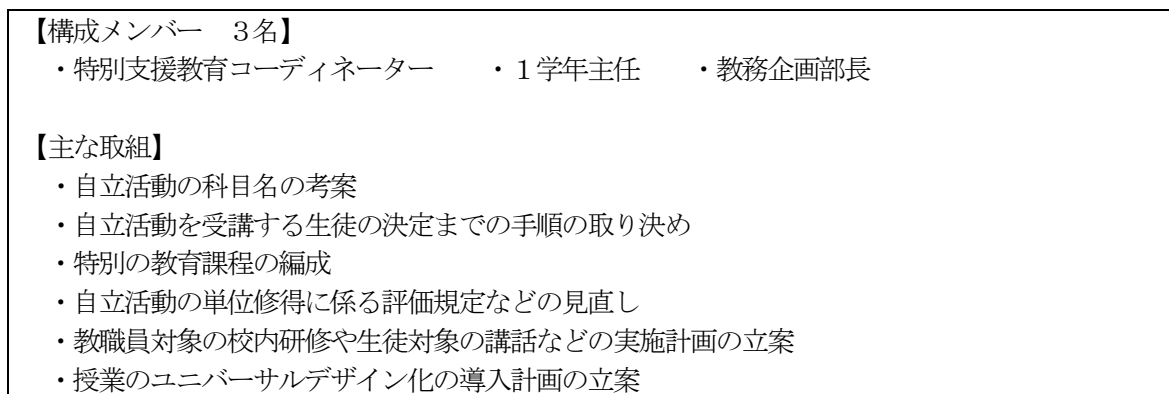


図5 通級指導準備委員会（平成30年度）について

令和元年度の校内体制は、既設の特別支援教育委員会が準備委員会の業務内容を引き継ぐ案も出された。しかし、構成メンバーが固定されており、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーも常駐ではなかった。また、委員会の構成人数も多いと感じた。このため、諸問題に対し迅速に対応するのが難しく、事あるごとに打合せを行うのが容易ではないと考えた。そこで、準備委員会の引き継ぎ事項の1つに、構成メンバーを精選し、機動性を重視した通級指導小委員会を特別支援教育委員会の下部組織として新設するよう提案をした。また、構成メンバーには教務的な諸問題に対し、速やかに対応することができるよう教務企画部に所属する教職員をメンバーに加えるようあわせて提案した（図6）。

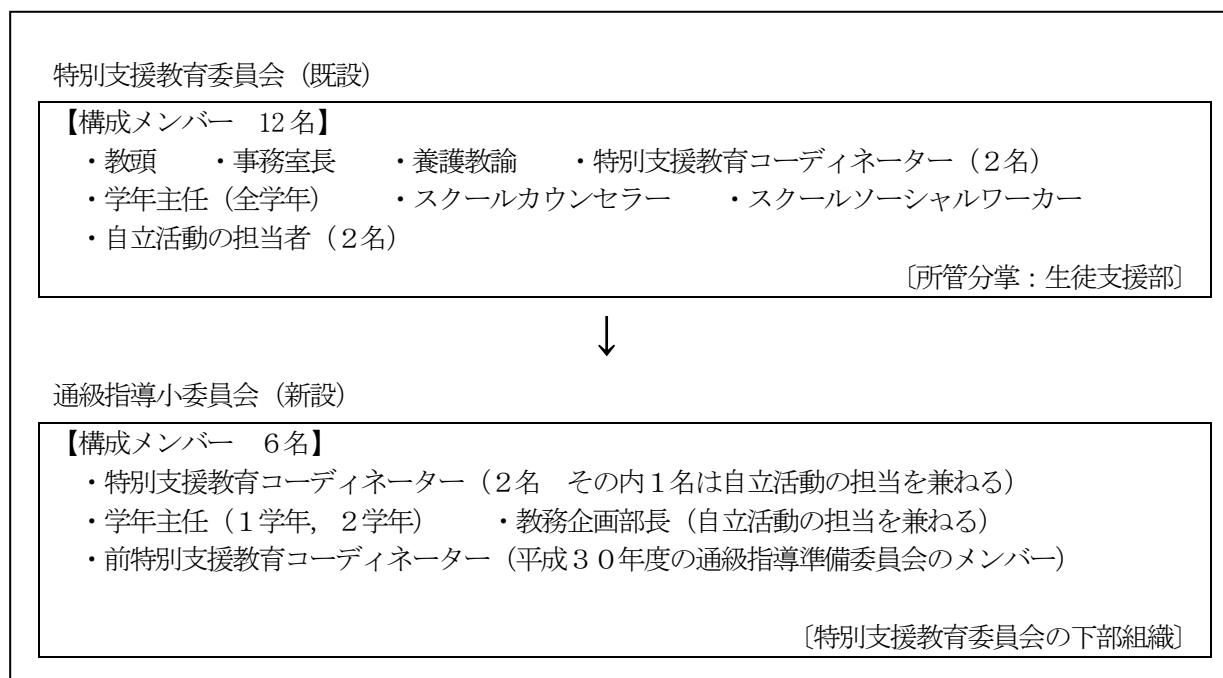


図6 通級による指導に関わる校内体制（令和元年度）

なお、令和2年度から3学年においても通級による指導を実施する場合は、通級指導小委員会の構成メンバーの入れ替えを行い、図7のように3学年主任および進路キャリア形成部長または部員をメンバーに加えることで、進路指導にも対応できる体制を整えるよう提案する予定でいる。このように、通級による指導に特化した組織を創設し、かつ年度ごとに構成メンバーの入れ替えを可能にすることで、今後も自立活動を受講する生徒の特性や必要な支援に対し、適切にかつ柔軟に対応できるようにしていきたいと考える。

【構成メンバー（案） 7名】

- ・特別支援教育コーディネーター（2名）
- ・学年主任（1学年，2学年，3学年）
- ・進路キャリア形成部長または部員
- ・教務企画部長または部員

図7 令和2年度の通級指導小委員会（提案予定）

3 通級による指導への理解を促すための教職員に対する取組

通級による指導という新しい取組を本校に定着させるためには、何よりも教職員が高校での通級による指導について理解を深めるとともに、通級の指導（自立活動）の担当の有無に関わらず、自立活動を受講している生徒に対して学校生活の中において適時適切な指導を行うことができるスキルを身につける必要があると考える。その理由は、自立活動の授業ではコミュニケーション力や人との関わり方への力の向上が認められるものの、クラスの中でそれらを適切に発揮できず、指導を受ける前とほとんど変わっていない、との報告がなされている生徒が一部存在するためである。よって、全ての教職員が授業やホールムーム時に自立活動を受講している生徒への接し方、声がけなどを工夫することで、自立活動で向上が認められた力を発揮できる場面をつくり、その力を引き出すことができるような指導力が必要になると考える。以上のことを踏まえ、本校では今年度、図8のように校内研修や公開研究授業を計画し、教職員の資質向上を図る予定でいる。

教職員対象の講話：令和元年9月24日（火）に実施

（対象）本校の教職員

（目的）今年度から実施している通級による指導に関して、先進校での取組について様々な観点から講話をしていただくことで、本校教職員の通級による指導の理解を深める。

（題目）高等学校における通級指導の実践から

（講師）山形県立新庄北高等学校最上校
教諭 結城 浩子

公開研究授業（自立活動）及び講話：令和元年11月6日（水）に実施予定

（対象）高等学校及び支援学校の教職員

【公開研究授業】

（目的）校種、教科を問わず広く参加者を募り、自立活動の授業での取組を公開し、様々な観点からの指導・助言をいただき、本校での通級による指導の取組をさらに深化・発展させる。

【講話】

（題目）全日制高等学校での通級による指導について

（講師）宮城県立角田支援学校
教諭 加茂 純

図8 令和元年度の教職員対象の校内研修等

4 通級による指導への理解を促すための生徒に対する取組

本校の通級による指導は、教育課程に加える（放課後に実施するパターン）か、または教育課程の一部を替える（授業時間内に実施するパターン）かの2通りから選択できる。今年度は自立活動を受講する2学年の7名の生徒全員が授業時間内での受講を希望したため、教育課程の一部を替え、図9のような特別の教育課程の編成を行った。ただし、選択群の時間帯に7名の生徒全員が自立活動の受講を可能にするような設定にはできなかったため、共通科目（古典A）の時間にも自立活動を設定することにした。今年度の自立活動は図書室で実施しているため、自立活動を受講する生徒の一部は共通科目（古典A）の時間に学級の他の生徒と異なる動き（図書室への移動）をしなければならない。そのため、自立活動を受講していない多くの生徒にとって、共通科目（古典A）の時間になると教室からいなくなってしまう同級生は気になる存在になってしまうことが予見された。このとき懸念されるのが、自立活動を受講する生徒が周りの生徒からの理解が得られず、いじめや中傷等の対象になってしまうのではないか、という点であった。そこで、本校では教科の学習指導だけではなく、ソーシャルスキルなどを向上させるための指導が存在することを通級による指導を実施する学年の生徒に周知しなければならないと考えた。よって、今年度、2学年の最初の学年集会時に図10

のような説明を通級指導小委員会の一員である私が代表して行った。なお、この際、自立活動を受講する全ての生徒から承諾を得た上で学年集会での説明をすることにした。

	進学	就職等	福祉				
1	現代文B(3)						
2							
3							
4	古典A／ 自立活動 (2)						
5							
6	世界史A(3) 【必履修科目】						
7							
8							
9	生物基礎(2) 【必履修科目】						
10							
11	体育(2) 【必履修科目】						
12							
13	保健(1) 【必履修科目】						
14							
15	コミュニケーション英語Ⅱ(3)						
16							
17	英語表現Ⅰ(2)						
18							
19	家庭総合(2) 【必履修科目】						
20							
21	数学Ⅱ(4)						
22							
23							
24							
25	選択A (2)	日本史B(4)	情報処理(2)	介護福祉基礎 (4)			
26	選択B (2)						
27							
28							
29	LHR(1)						
30	総合的な学習の時間(1)						

* 本校では、自立活動を受講する生徒の希望があれば放課後に自立活動の授業を設定することも可能である。

図9 令和元年度 2学年の教育課程（特別の教育課程）

【通級による指導の説明の要旨】 ・教科の学習指導だけではなく、ソーシャルスキルなどの向上を目的とした活動を生徒および保護者の同意のもと、受講する生徒がいること。 ・この活動は週2時間実施され、設定されている時間帯は古典Aおよび選択群Bであること。 ・本校では教科の学習の他に、ソーシャルスキルなどの向上を目的とする学びもあることを理解して欲しいこと。また、そのような学びに取り組む同級生を温かく見守って欲しいこと。 ・2学年の生徒の理解と協力のもと、この新しい取組を育んでいきたいと考えていること。

図10 2学年の最初の学年集会での説明

この他、共生社会教育の一環として多様性を柔軟に受け入れることができるこころの醸成を図ることを目的にした出前講義を2学年の生徒対象に東北福祉大学の先生を招き、実施した。この講義の感想の一部が図11の通りである。講

義の内容は本校の生徒にとって難しいものであったが、生徒の感想から多様性を受け入れる必要性について理解できた生徒が想定していた以上に多くいることが分かった。なお、今年度内に令和2年度から自立活動を受講する生徒が3名在籍している1学年でも今回と同様の取組を計画している。このように学校全体で共生社会教育に取り組み、将来、共生社会を支える一人として人々の多様性を受け入れることができるこころの育成を推進していく予定である。

- ・自分の勝手な想像や思い込みで差別をするのではなく、生きていく中で必要な区別をしっかりと理解し、自分とは違う他者を思いやる心が社会には必要だと思った。だれかの居場所をなくすのではなく、広い心をもってだれかを助けられるような人になりたい。
- ・これからは「共生」の世の中になっていくことを知りました。（中略）差別意識の抜けない人々がいる中で、字を変えることに意味がない。すごく共感した。心に残った。差別、区別、言葉にそんなに差はないけど意味が全然違う。

図 11 出前講義（共生社会教育）を受けての生徒の感想（一部）

IV 取組の成果

通級による指導の中で、難しい取組の一つが自立活動を受講する生徒の決定であった。本校では、生徒および保護者の実態把握は調査用紙を活用し、それに基づき面談を実施することで受講生徒を絞っていった。絞り込みの際、調査用紙を用いたことで客観性を高めることができた。よって、なぜ面談実施の対象になったのかを生徒および保護者に納得させることができ、通級による指導の説明を終始スムーズに行うことができた。このことから、本校では令和2年度以降も基本的にこの方法により面談実施の生徒を絞り込み、自立活動を受講する生徒を決定していきたい。

次に校内体制に関してだが、通級指導小委員会の構成メンバーに教務企画部長を入れたことで、特別の教育課程の編成、評価規定の一部修正などの教務的な部分を短時間で、かつスムーズに整えることが可能であった。高校での通級による指導は、特別の教育課程の編成や単位認定などが関わるため、その点を踏まえた上で委員会などのメンバーを選定する必要があると考える。

最後に教職員や生徒に対する取組は、これから実施予定の企画もあるが、先進校の教員を講師として招いての講話を実施したことで教職員については、通級による指導という新しい取組だけではなく、特別支援教育への関心の高まりも感じられた。また、生徒については、出前講義を実施したことで共生社会への関心や多様な学びへの理解の芽生えが感じられた。両方とも今のところ確たるものはないが、新しい取組がきっかけとなり、特別支援教育や共生社会教育に向けた胎動を感じることができた点では、通級による指導に取り組んだ甲斐があったと考える。

V 課題

通級による指導を導入して半年が経過したが、現在、3つの課題が見出された。

1 自立活動を受講する生徒の選定

本校では、生徒および保護者に対する調査に基づき、自立活動を受講する生徒を決定するという方法をとっている。しかし、平成30年度の準備段階から、日常の学校生活の観察などを通して教職員が受講生徒の検討をすることができないのか、という意見が出されていた。確かに生徒および保護者への調査だけでは、自立活動を学ぶべき生徒が取り残される可能性は否めない。そこで、今年度、調査に基づいた受講生徒の絞り込みの後に行った教職員への調査結果と自立活動の受講を希望する生徒の間に相関関係を見いだすことができれば、生徒および保護者への調査結果に依らない方法での絞り込みも可能になるのではないかと考える。今後、この方法を確立するために、令和2年度以降も表3に示したような相関関係のデータを蓄積・分析していきたい。そして、生徒および保護者に対する調査以外で自立活動を受講する生徒を絞り込む方法を模索したいと考える。

2 自立活動を受講する生徒のニーズ把握

本講では、自立活動を受講する生徒の選定過程において、個々の生徒の特性を把握した上で生徒および保護者に対して指導内容などの説明を行い、合意形成を得た上で授業を行っている。しかし、実際に指導が始まると生徒がイメージしていた指導と実際の指導のズレが原因による授業に対する意欲の低下、障害の程度や特別の教育的ニーズの異なる生徒どうしが同一の時間帯で指導を受けることにより個々の生徒の特性に応じた指導を行うことの難しさなどの課題が見出されてきた。したがって、受講生徒の選定後、自立活動の授業が始まる期間までに面談などを実施し、生徒に対して指導内容を十分に理解させる必要がある。また、通級による指導の担当者が中心となり生徒一人一人の個別の指導計画を作成し、個々の生徒の特性への理解を深めるとともに、指導内容を決めるまでの準備期間を十分にとるようにしたい。

3 通級による指導の担当者以外の参画の推進

図 12 は、9 月 24 日に実施した校内研修での本校教職員の感想の一部である。本校の経営方針にも掲げられている通級による指導を学校の特色として定着させるためには、教職員間で共通理解を図り、直接的・間接的に通級による指導に関わる機会を設けることで通級による指導の担当者だけの通級にならないようにすることが重要であると考え。そこで、今年度は公開研究授業を含めた校内研修を 2 回実施する他に職員会議などの機会に通級による指導を支える柱を確認したり、通級による指導の実施要綱を定め本校での指導の方向性を確認したり、通級による指導に関する様々な資料を綴じたファイルを作成し教職員一人一人に配付したりすることなどで、周知を図ってきた。しかし、1 回目の校内研修の感想から、通級による指導に関わる機会を十分に設定しきれていないことが分かった。今後は、自立活動の授業への参観の声かけを積極的行うとともに、令和 2 年度に自立活動を受講する生徒 7 名（新 3 学年 4 名，新 2 学年 3 名）の個別の指導計画などの作成に学年の教職員が関わる機会をつくることで、担当者以外の教職員の当事者性を高める取組を行いたい。

- ・通級による指導について、本校でも取り組んではいるものの、それに深く関わる機会が無かったため、とても理解が深まった。
- ・今年度から本校でも通級が始まりましたが、私自身通級に関わることがほとんどなく通級についての理解がない状態でした。
- ・高校における通級指導について、未だに内容や進め方について理解の浅い部分があったので、大変参考になった。

図 12 校内研修を受けての教職員の感想（一部）

VI 終わりに

全日制高等学校の通級による指導は、まだ全国的にも数が少なく、事例もそう多くない。よって、本校と同様に試行錯誤を繰り返しながら指導している高校が多数存在すると考えられる。私は、自立活動において生徒を指導する立場の一人として、コミュニケーション力や人間関係形成力に対し、困り感や不安を払拭するため、一生懸命に自立活動に取り組んでいる生徒たちの姿を間近で見ている。そのため、通級による指導のように多様な学びの場を高校にも整える必要性は十分に理解できる。また、生徒のコミュニケーション力や人間関係形成力が少しずつではあるが改善されていく状況を目の当たりにすると、この取組をもっと推進していきたいとも考える。しかし、一方で昨年度の準備期間や今年度の 4 月からの取組を通し、乗り越えなければならない課題などが多く、容易に導入できるものではない、とも感じている。特に、合意形成を得るまでの過程や校内の全ての教職員が通級による指導に何らかの形で関わる体制作りには日々難しさを感じている。そこで、今後は県内外を問わず通級による指導を実施している高校、またはこれから実施しようとしている高校が抱える課題を互いに共有し、かつ知恵を出し合うことで課題の解決を図ることができるようなネットワーク作りにもチャレンジし、全日制高等学校における通級による指導の推進及び定着に尽力したい。

＜参考文献＞

「おさえておきたい 8 つの課題と課題解決のための 10 のポイント」

独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所 平成 30 年 3 月

改訂第 3 版 「障害に応じた通級による指導の手引」 海文堂 文部科学省 編著